

ローレル會詠草

彩鳥の桃いろなるが飛びて來ぬ君と雨きく夕ぐれの月に
長谷白眠

みづうみもやがて見ゆべき二荒の山すそみちや龍膽の花
佐藤大蛾

しら梅や五百の稚兒等招じ來て管絃樂の幔幕打たん
中尾紫川

潮さぬに舟出せし子を思ひては泣きぬ昔の安濃の松げら
三谷蘆華

七谷の老木ことく聲あげて叫ぶに似たる山おろしかな
都河不老

磯やかた姉と机をならべては千鳥鳴く夜を歌ならひ居り
吉岡夕舟

水かひて駒をいたはる老將のかぶとに照りぬ森こぼれ日
長谷川花舟

たそがれや歌聲やみて少女等の銀杏の森の團居くづれぬ
高村紫翠

くしび音に百鳥うたふ野の春や緑小草の香もあたゝかう
山本春陽

日の御神天馬よそほひ鞭とりて雲の彩門を今し立たすも
大柳錦子

ローレルの常葉環冠丹照る實は玉と譽れの額にかぐはし
渡邊光風

河合新藏氏は今回入社致され爾後本誌に對し大に盡力致さるべく候

次號の口繪は河合氏執筆致さるべく候

會員組織の會則は同人何れも多忙の爲め未だ合議の機無之延引致候今少し御待下され度候

本號はいさゝか紙數を増加致置候漸次擴張して終には三十二頁位迄に致す考に候但記事の都合により毎號多少の増減は可有之豫め御承知置被下度候

臨時増刊は四月中旬發行の豫定

私は毎月上半月間を修養の時に宛て居る爲め自然旅行等にて不在の事多く隨て其の間の御來信に對しては御返事延引可致候間御含み置被下度候 大下藤次郎

松山筒井氏へ 賣魚婦の風俗面白く拜見致候肩のほとりに多少批難有之候へ共腰の据り工合など重きものを捧げる體度として極めて自然に見受申候

近事雜聞

同好畫會は先頃東京美術學校講堂に於て盛なる發會式を舉げ尙ほ本年秋期には續いて展覽會を開設すべしといふ

石川欽一郎其他の二三氏は神田美土代町青年會館に於て毎土曜日午後二時方水彩畫の講習會を開き初學者を指導すべしといふ